

実践1

「チャンプ本」をめぐろう——魅力的な提案のしかたを考える

使用教材

「魅力的な提案をしよう」(二年)「話すこと・聞くこと」

山梨大学教育学部附属中学校教諭 富高勇樹 とみ たか ゆう き

1 はじめに

生徒が、学習したことや身につけた力を「日常生活に生かせようだ・生かすことができた」と実感できるようにしたい。そして、それが将来の社会生活で生きて働く力になることを実感させたいと願い、日々の授業に取り組んでいる。なぜなら、そのような実感を伴ったときに、学習内容や身につけた力が意味のあるものとなると考えるからである。

本実践では、特に「話す能力」に焦点を当てることとした。それは、第二学年の夏休み明けから、三年生による生徒会活動の引き継ぎが本格的に行われ、部活動や委員

会活動、生徒会役員選挙など、日常生活の中で提案をしたり、自分の考えを話したりする機会が増えてくるからである。また、プレゼンテーションの技術だけでなく、目的意識や相手意識をもった表現は、将来の社会生活の中で必要とされる力でもある。

そこで、本実践では、生徒が目的意識と相手意識をもって活動に取り組めるように、「ビブリオバトル」(※)という言語活動を設定した。ビブリオバトルは、聞き手がいちばん読みたくなった「チャンプ本」を決定するところにポイントがある。話し手は、人から評価されるという緊張もあるが、「自分が選んだ本の魅力をしっかりと伝えたい、チャンプ本に選ばれたい」という思いから

相手や目的を意識した活動を行うことになる。また、聞き手は、プレゼンテーションを評価するという責任があるため、それぞれのプレゼンテーションのよしあしや共通点・相違点を意識しながら聞く必要がある。つまり、話し手・聞き手ともに、目的が明確であるという利点がある。

自分の選んだ本の魅力を紹介する活動を通して、聞き手を想定し、論理的な構成や展開を考えて話す力を身につけさせたい。そして、こうした活動は、将来的にも生きて働く力となることを十分意識させたい。

2 指導計画(全五時間)

▼目標

○聞き手を想定し、論理的な構成や展開を考えて話す。

○話し合い活動を通して、わかりやすいプレゼンテーションの構成や展開について考えを深める。

○相手や目的に応じて、話の形態や展開に違いがあることを理解する。

▼展開

第一次(一時間)

・プリントとビブリオバトルの映像を見て、

学習の見通しをもつ。

第二次(三時間)

・紹介する本を選んで、情報を集め、整理する。

・相手を想定して、プレゼンテーションの構成メモを作成し、構成や展開を工夫して話す練習をする。

・グループに分かれ、ビブリオバトルを行う。

第三次(二時間)

・チャンプ本に選んだプレゼンテーションをグループで分析し、論理的な構成や展開について考え、話し合う。

3 指導の工夫・学習の実際

①活動にビブリオバトルを設定する

ビブリオバトルには公式ルールがある。本実践では、何を話してよいかわからない生徒が人前で話すことに苦手意識を感じてしまうことを避けるため、公式ルールを一部変更して、本の紹介時間を三分に短縮することにした。

「話すこと」に焦点化して、読解を苦手とする生徒でも紹介する情報を収集しやすいように、読解の観点(既習の学習用語)やその本にまつわる自身のエピソードなどを考えさせたり、他の本と比較させたりと、

読むことを助けるような手立てを用意して、全員がビブリオバトルに臨めるようにした。

②構想ワークシートをもとに提案する

本実践では、発表原稿ではなく、構想ワークシートだけを用意させるようにし、発表者は、相手や状況に応じて、話すことや話し方を変更してプレゼンテーションを行ってもよいことにした。スピーチやプレゼンテーションで大事なものは、聞き手の反応を見ながら、臨機応変に対応することだからである。

また、聞き手の反応を想定する際、それらを具体的な言葉(例えば、「わたしにもある」「えっ、意外だ」「続きが気になる」など)で考えさせることにした。より具体的にイメージさせることは、構成や内容を考えたり、情報を整理したりするための有効な手立てとなったと思われる。

③振り返りにICT機器を活用する

前述のように、本実践では、第三次で、プレゼンテーションを分析する活動を行った。より効果的に振り返りを行うために、ICT機器を活用して、発表を可視化できるよう工夫した。メモを取りながら聞くことも必要だが、ついメモを書くことだけに

集中してしまう生徒もいる。聞く場面では聞くことに集中できるように、今回、振り返りの時間は別に設定した。

④「協働」を学習過程に位置づける

本校国語科では、どの学習でも「協働」する活動を位置づけている。協働において、自分とは異なる考えに出会い、自他の考えを相互吟味することで、考えの深化が期待できると考えている。

本実践では、第二次・第三次で協働を位置づけた。例えば、第二次では、ビブリオバトルを行うグループとは別のグループの仲間を聞き手として話す練習を行わせた。次ページのワークシートの一段目が練習段階の構想、三段目が本番の構想である。

活動後、生徒は聞き手を引きつける構成の工夫を取り入れたり、聞き手をわくわくさせるように、内容を変更したりしていた。また、授業後の生徒の感想では、「何を伝えたいのかわかりにくいという意見を聞いて、初め、自分の述べたいことをただグラフと述べていたことに気づきました。そこで、情報を整理し、大切な情報に絞ることが必要だとわかりました。」と記述している。

このように協働は、考えの深化に有効な

手立てであったと思われる。ただ、学び合
いは、一朝一夕にできるものではなく、日
常的な指導の必要性も実感している。

4 おわりに

生徒の振り返りの記述の中には、これま
での自分の言語生活を振り返り、学習した

ことをこれからの生活に生かそうとする姿
が表れていたものもあり、一定の成果を上
げたのではないかと考えている。
今後も国語の学習で学んだこと、身につ
けた力を日常の言語生活に生かせるという
実感がもてたり、それが将来の社会生活で
生きる力であると意識させたりする授業を
心がけていきたい。

自分が伝えたい本の魅力

キーワードでプレゼンテーションの構成メモを作ろう

小さい2人の視点から書かれていて、ほっとする感じがしている。
でも、自分を信じて自分の好きな道を進めばいいということ。

日常の中にある、自分なりの見方

自分のプレゼンテーション

問題提起

「私たちの生活とからめて話を
する。
あなたは、冒険をしたことあることば
ある、日々の生活から、いっていい
ことあるかい？」
「ありすし」
「理由が分からないと思う。」
「冒険の内容や、いっていい
冒険の中から自分が
最後に残った冒険をま
い、その結果はどつ
か、どうなるか、ま
いにどうなるか。」

「エイヴォンとエドワードが、エド
ワードが、校の上で冒険を
する冒険に出る物語
かかれ方」
「小さい2人の視点から書かれてい
て、普段は目にとれないようなところ
が、生かすことと書かれていて、迫力がある。」

引用

聞き手の 反応

自分のプレゼンテーション

問題提起

「あなたは、日常の生活から、いって
いい、冒険をしたことあることば
ある、日々の生活から、いっていい
ことあるかい？」
「ありすし」
「理由が分からないと思う。」
「冒険の内容や、いっていい
冒険の中から自分が
最後に残った冒険をま
い、その結果はどつ
か、どうなるか、ま
いにどうなるか。」

ありすし

「エイヴォンとエドワードが、エド
ワードが、校の上で冒険を
する冒険に出る物語
かかれ方」
「小さい2人の視点から書かれてい
て、普段は目にとれないようなところ
が、生かすことと書かれていて、迫力がある。」

材料

「エイヴォンとエドワードが、エド
ワードが、校の上で冒険を
する冒険に出る物語
かかれ方」
「小さい2人の視点から書かれてい
て、普段は目にとれないようなところ
が、生かすことと書かれていて、迫力がある。」

▲構想ワークシートの例



溝上先生が見る

社会生活へ つなげるポイント

他者を前にして「話す」「発表する」「聞
(聴く)」「機会をつくることそれ自体が、
社会生活へつなげる決定的なポイントで
す。どんなに稚拙でもいいから、何度も
トライして、一歩でも二歩でも上を目指
した話すこと・聞(聴く)ことができるよ
うになる機会をつくってあげたいもので
す。もちろん、機会だけではなく、同時に、
「話す」ポイント(本の魅力を伝える、相
手の評価を意識して話を構成する)、「聞
(聴く)ポイント(他のプレゼンのよしあ
しや共通点・相違点を意識して聞(聴く)
も与えられなければなりません。実践で
はそれがしっかり押さえられています。
メモの取り方については、今後、段階的
に指導し、それが社会生活につながるも
のであると生徒に伝えていけるとよいで
しょう。

この実践に限らず、日常の授業の中で
も、「話す」「発表する」「聞(聴く)」といっ
た言語活動を含むアクティブラーニングを
取り入れてもらえたらと思います。日常
化こそが、社会へつなげる最強法則です。